

「かーちゃんのカ・プロジェクト」渡邊とみ子さんをお呼びして

「福島の間 被災地だからみえてくるもの
あきらめず、協同のちからで福幸を！」 お話会&お茶っこ会報告

日時：2016年7月25日（月）13：30～15：30

会場：常総市保健センター 2階

主催：橋本町町内会、森下町町内会、NPO commons、常総生協、茨城県生協連合会、
ワーカーズコープちば、フードバンクちば、ワーカーズコープ・センター事業団
東関東事業本部

協力：いばらきコープ

後援：常総市、常総市社会福祉協議会

参加者数：120名

【当日の様子】

昨年の大規模水害で深刻な被害を受けた常総市水海道の橋本町、森下町の方々と、支援でつながった各市民団体が結集して、福島県飯舘村から避難しておられる、NPO法人かーちゃんのカ・プロジェクトの渡邊とみ子さんをお招きしてお話会（講演会）とお茶っこ会（居場所カフェ）を開催しました。開催に伴い、福島県の「ふくしまから はじめよう。」「ふくしまの今を語る人」派遣」助成事業を活用させていただきました。



当日は地域の方々を中心に、予想を上回る120名の方が来場され、急遽、会場の客席を増設するほどでした。



主催団体を代表し、橋本町町内会古矢区長が主催者の挨拶を致しました。続いて福島から前座として派遣されたお笑いグループ「ふくしまボンガーズ」が登場し、会場を笑いに包みつつも、復興にはまだまだ遠い福島の現状について参加者に伝えてくれました。



前座が終わり、いよいよ渡邊とみ子さんのお話会がスタートしました。震災以前から、周辺自治体との広域合併に反対し、村の存続と自立のためのまちづくりの活動や地域のための地元ブランド野菜の研究開発の取組みや、六次産業化を目指して自身の加工場を立ち上げるなど様々な経験を積んでこられました。この経験が震災、原発事故以降の活動の基盤となったそうです。

東日本大震災と東電福島第一原子力発電所事故の後、渡邊さんは福島大学小規模自治体研究所とともに「かーちゃんのカ・プロジェクト」を立ち上げ、被災し避難していたかーちゃん達とともにあぶくま地域の食文化の継承とかーちゃん達の生きがいつくりに取り組みできました。福幸をめざして、あきらめずに前を向いてみんなで進んでいこうとする協同の精神に基づいた取り組みの軌跡を語られました。

その間、裏方では第2部のお茶っこ会の準備をいばらきコープの組合員さん達を中心となって進めてくれていました。いばらきコープのかーちゃん達もチームワークがすこぶる良く、てきぱきとあっという間に用意をしていました。この日は福島市の「かんだファーム」から試食用の桃をたくさん戴き、それを食べやすいように切り分けるなど準備してくれました。



第1部のお話会も終わり、5分間の休憩時間に参加者全員で一斉にお茶っこ会の会場づくりが行われました。被災地間の交流のためにと、茨城生協連合会からお茶とかーちゃん達のお漬物やお菓子のご寄附があり、皆さんわいわいと楽しく美味しく戴いておりました。





後半のお茶っこ会ではとみ子さんへの質問や感想が出され、かーちゃん達の漬物のつけ方に関する質問なども飛び交いました。水海道のかーちゃん達と飯舘村のかーちゃんとのとても賑やかで楽しい交流のひと時となりました。

参加者からも、被災地を忘れないことと、たとえ災害が起きても互いに支え合い、協同し合うことができるよう、自分たちの地域に循環型の食の自給圏を築くことの重要性が指摘されました。

また、主催団体の一つとして生協連合会会長の佐藤さんから連帯のメッセージを頂きました。



最後に主催団体を代表して、森下町町内会西堀区長が閉会と感謝の挨拶をされ、今後の福島と常総の福幸への絆と支援を確認して、閉会となりました。

渡邊とみ子さん始め、多くの方々の協力と協同のちからで、たいへんあたたかな良い学びと交流の機会となりました。



災害の質は違うものの、福島のかーちゃん達のつらさに常総のかーちゃん達も他人ごとでない想いだったようです。被災し、傷ついた人たち同士だからこそ分かることが確かにあり、その痛みをその人たちと分かち合うことこそ、協同組合が担う役割の本質があるということを教わったように思いました。

福島も常総も、まだまだ本当の復興にはほど遠い状況です。人の心の福幸がなされるまで、それに寄り添い続けていくこと。地域の方々、支援団体のそれぞれが「協同」や「地域」、「支援」といったことの本質を改めて考えさせられる機会となったように思います。

文責：榎本 木綿（常総生活協同組合）